

帰国報告

平成23年度末帰国 元パリ日本人学校
札幌市立西宮の沢小学校
教諭 上田 隆之

2009年4月～2012年3月迄、フランス共和国内、パリ日本人学校へ3年間派遣された概要について、以下の通り報告致します。

1 フランス共和国、パリ市、パリ市郊外モンテニー市概要

フランス共和国（以下フランス）は、世界一観光客を集め、芸術・文化・食・また自然において、世界から一目置かれ、また世界中の人々の憧れを集める国である。人気の観光地には、西部には牡蠣・塩の名産地であるブルターニュ地方、モンサンミシェルで有名なノルマンディー地方、東部にはアルプス山脈のふもとシャモニーやエビアン、南部には世界的な人気を誇る、ニース・モナコ・カンヌからアルル・エクスアンプロバンスにかけて地中海沿岸などがあるが、やはり芸術の都パリは中でも世界一の観光客からの人気を誇る街である。



パリ市は、フランス最大の都市であり、同国の政治、経済、文化などの中心である。また、ニューヨーク、ロンドン、東京などと並ぶ世界トップクラスの世界都市でもある。パリ盆地のほぼ中央に位置し、市内をセーヌ川が貫く。この川の中州であるシテ島を中心に発達した。行政上では、1コミュン単独で県を構成する特別市であり、ルーヴル美術館を含む1区を中心に、時計回りに20の行政区が並ぶ。北緯49度とやや高緯度に位置するが、温かい北大西洋海流と偏西風によって一年を通して比較的温暖となっており、西岸海洋性気候の代表的な都市である。市域は城郭都市時代の城壁跡に造られた環状高速道路の内側の市街地（面積は86.99平方km）、および、その外側西部のブローニュの森と外側東部のヴァンセンヌの森を併せた形となっており、面積は105.4平方km。市域人口は1950年代の約290万人を絶頂に減少し続けたが、ここ数年は微増傾向に転じており、2007年現在で217万人である。1960年代以降、旧植民地であったアフリカ中部・北部やインドシナ半島、更に近年は中近東や東欧、中国などからの移民も増え、パリジャン・パリジェンヌも多民族・多人種化している。ルーブル・オルセー美術館をはじめとした、世界的有名な絵や像がある美術館。オペラ座・ノートルダム大聖堂をはじめとした、歴史的建造物群。そして、エッフェル塔・シャンゼリゼ通り・凱旋門等、パリを象徴する場所には、多くの観光客でごった返している。



このような、パリ市の面積は前述の通り、札幌市の中央区と白石区を足した程度しかなく、非常にコンパクトである。そのため、人口増に伴い、1970年代初頭より国の政策として、パリ市近郊に計画的に街づくりを行った。その中の一つに、パリ市より南西約25キロにモンテニー市があり、そこに現在パリ日本人学校がある。歴史あるフランスの中では異色な非常に近代的な街である。モンテニー市は中でも、「教育」を中心に作られた街であり、大学・高校等も整備されており、落ち着いた環境である。近くには、ベルサイユ宮殿のあるベルサイユ市、レオナールフジタのアトリエのあるエソンヌまでも市道で20分程度で行くことができ、芸術・文化に触れる機会も多い。



2 日仏文化学院パリ日本人学校概要

日仏文化学院パリ日本人学校は、文部省の認定校として、日本国の学校教育法及び関係法規に従って、初等・中等普通教育を実施することを目的としている。さらに、日本とフランス共和国間の文化・教育交流を図り、相互理解を深めあう教育活動にも重点を置いた教育活動を展開している。

1973年10月に、在仏日本人の増加により、日本の子女教育機会を確実に行うために、日本人会、日本企業を中心として設立された。当初は、パリ市内のエッフェル塔近くにある、トロカデロに校舎を構えた。しかし、校舎は非常に狭く、体育の授業は体育館の1/4程度しかない中庭で、また近隣住民から苦情を受けないために静かに行う等の制約があった。教室も、学年によっては、地下室のようなところで行わなくてはいけない学年もあり、兼ねてから移転の動きがあった。その後、平成に入りパリ市南西約25キロにある、モンチニー市に候補の土地を見つける。一番の決め手は、子どもたちがのびのび遊ぶことができる校庭があること、であった。そのため、地価の高いパリ市は候補からはずれ、バス通学という制約がつくが、モンチニー市に移転が決まった。

その後、平成10年前後をピークに児童数・生徒数は増加を続け、最大400名程度に膨らんでゆくと、その後は企業撤退、景気後退の影響も受け、減少に転じてゆく。現在は、全校児童・生徒200名、小1～中3まで各1学級、授業料・交通費合わせて、約5万～6万円程度である。

〈教員配置〉

現在は、教頭・校長を除き、派遣教員11名おり、それぞれ教務主任、中学部主任、担任という形で仕事を分担している。主に、派遣校種により配属が決定されるが、近年は経験にかかわらず、所有免許によって配置される傾向が多い。中には、小1担任の後に、中学部担任というケースも散見された。学年1担任であるので、全ての学年にかかわる仕事は一人で行うことになる。そこには、もちろんよさもあるが、文化の違う都道府県から派遣されている先生のもとでは、若干の学年間のズレも生じる。そこで、小さな学校でもあるので、放課後に毎日ミーティングを行い、子どもたちの情報を共有した。

《児童・生徒像》

主に、大企業に所属する家庭の子息が多く、約3～5年で帰国される家庭が多い。中には、他国への転勤がある家庭もあるが、子どもの多くは中学もしくは高校受験を機に、母親と帰国するケースが多い。そのため、教育に対する意識が子ども・保護者ともに高く、学校に求めるレベルも高い。基本は文部科学省に準拠しながらも、発展的学習を行ったり、模擬面接指導を小学校から行ったりしている。子どもたちは、非常に素直で前向きであり、志が高い子が揃っている。そのため、札幌では考えられないレベルの学級構成になることが多い。

〈職務内容〉

主に、日本国内の学校である仕事に関しては、ほぼ全てである。小学校であれば、運動会・学習発表会、中学部であれば、球技大会、生徒会役員選挙、中間期末テスト等、日本同様に行っている。特に行事は、日本ではない中で日本と同様に行う難しさがある。これらに加え、以下の点がパリ日本人学校特有の仕事である。

・教材教具については全て教員個人で購入→後に精算

事務の職員は3人いるが、学校会計、通訳、バス等の仕事を行っているため、その他の仕事は教員が行う。画用紙等から教材園の植物まで、教員自ら手に入れる。



(パリ日本人学校 旧トロカデロ校舎)



(パリ日本人学校 サンカンタン校舎)

・子どもたちの昼食管理

基本的には弁当であるが、無い子は弁当屋に10時までに発注を行う。

・バスの登下校に合わせた授業運営

高速道路がしばしば渋滞する。また、バス会社も日本のように時間に的確ではなく、しばしばトラブルにもなる。その際に確実に対応するためにも、子どもたちがバスに乗る7:20には全職員が出勤しているようにしている。

・フランス語・英会話・音楽の先生との折衝

以上の先生は、現地採用もしくは現地の会社からの派遣の先生で、時には外国語で話をしたり、授業に対する文化の差を埋める努力も必要になる。

・小中連携関連

中学部生徒会、部活から縦割り集会企画等で折衝を行ったり、実際に子どもたちにかかわったりする機会があった。

・補修校指導

フランス国内には17の補修校が各地にある。それらの補修校は、主に保護者が中心となって運営を行っており、実際の指導法についてや指導についての悩み等を聞きながら、日本人学校の先生方が指導や模範授業を行う場が、年に2度ほどある。また、年に1度日本人学校が主催となった作文コンクールを行い、それぞれの補修校の子どもたちが書いた作文を全職員で批評を行う場もある。

・日本人学校祭り運営

この祭りは、現地在住日本人も楽しみにしており、子どもたちの指導から、出展会社との折衝、現地校への案内等、非常に手間隙がかかる。

・修学旅行、社会見学等の開発から下見まで

日本とは違い、言葉・文化も違うため、非常に苦勞を要する。

・マスコミ、大使館、海外子女教育財団対応 等々…

以上が主に日本の仕事に加えて、力を要する部分である。

〈パリ日本人学校の特色〉

芸術・文化の都パリ近郊にある本校では、非常に有意義な学習活動ができた。

・遠足

遠足は、ベルサイユ宮殿内にある庭園で行った。世界遺産内で全学年縦割りでオリエンテーリングを行い、非常に有意義な体験ができた。

・スキー学習（中学部）

アルプス山脈にて、4泊5日の合宿で行う。スキーに慣れていない本州の子どもたちも、初心者プログラムの中で、安心して活動に取り組むことができた。

・社会見学

小1～3年までは、生活科の栗拾いから動物園見学、現地スーパーマーケット見学等、日本同様に行えた。小4以降は以下の通り、パリの特性を活かした社会見学ができた。

小4…現地消防署見学、オルセー美術館（模写）、下水道施設見学

小5…ルノー工場見学、オランジュリー美術館（模写）、NHKヨーロッパ総局見学

小6…ポンピドゥー美術館（指導員解説）、国連 UNESCO 本部、ロダン美術館、国立博物館見学

中学部…オーベルシュルオワーズ（ゴッホ終焉の地）、

ジベルニー（モネ：睡蓮の池）、バルピゾン

（落穂拾い）の現地写生会 ルーブル美術館見

学（指導員解説） 現地邦人会社（大企業）

での1日職場体験

私個人的には、UNESCO 本部の見学が子どもたちにとっても私にとっても非常に有意義なものになった。実際に働かされている日本人の方から、世界遺産センター長の話まで聞けたことは、教科書



には書かれていない、素晴らしさ、難しさを学ぶことができた。また、現地美術館では、自由に写生ができ、本物を見ながら、また中学部はその場所に行きながら模写ができる素晴らしさは、何物にも変え難い有意義な時間となった。

・現地校との交流

基本的には年に1度、モンチニー市にある現地小中学校と交流をもち、お互い行き来をしている。招待する際には、(日本のよさを伝えつつ、現地のみんなも楽しめるもの)ということを中心に、各学年の児童・生徒の発達段階に応じたプログラムを考え、もてなしている。また、その会に向け、フランス語の学習を高めていき、簡単な挨拶やコミュニケーションができるようにしてゆく。

小学部低学年

主におにごっこやドッジボール、日本の手遊び等で遊ぶ。

小学部高学年

主に、日本の遊び(けんだま、こま)や習字を教えてかかわり合いをもつ。

中学部

スポーツや演劇を通して、日本の文化を伝える努力をする。

逆に招待される場では、相手の先生が簡単なゲーム(ミュージックゲーム、ダンシングゲーム等)を構成しもてなしてくれる。給食も一緒に食べるが、フランス式で前菜・主食・デザートで出てくる。これらを通し、本や言葉では感じる事ができない、肌でフランスを体感でき、この上ない現地理解学習になっている。

・体験学習(修学旅行)

日本の小学校では、宿泊を伴う体験的修学的活動は、各学年・学級経営の中でも、非常に重要なものであり、子ども達にとっても、学級の団結力を高めたり、自立を促したりなど、教育課程の中でも非常に有意なものとして位置づけられており、各都道府県におかれても大切にされている活動である。フランスでも、同様な位置づけである。私が行った年は更新年であり、新しい場所を開拓した。その際にまとめた文書には、日本との違いやフランス文化についても触れた。せっかくの機会であるので、以下一部抜粋し掲載させていただく。

文部科学省提出文書 現地理解報告書より

今回、3度に渡り東仏シャンパーニュ地方にある、現地体験的学習が十分にできる宿泊施設周辺(フランスーの人造湖周辺)の下見、活動に参加することができた。今回は、それらを通じて感じた日仏における考え方・位置づけ・システムの違いをまとめ、昨年度報告にあった授業実践等の違いとも絡めて考察してみたい。

①指導・管理の役割

今回最も驚いた点である。今回の宿泊施設には、フランスの現地校の子ども達も2校ほど来ていた。そのうち1校は、教員が来ていなかった。またもう1校も、先生は別宿舎で食事時にはワインを飲んでいた。

フランスで体験学習を行う際には、間に教育連盟という公的な機関が仲介を行う。その際、出発のバス乗車時から帰校時までの責任を一切が教育連盟が負うシステムになっている。その為、現地校の子ども達は、バスに乗車してからは、教員が一切付かず、宿舎ではアニマターと呼ばれる指導担当者が一切の責任を負い、起床から就寝までの子ども達の指導・管理を行い、活動については担当インストラクターが指導を行う。

今回、私たちは教務主任以下3名で5・6年で48名を引率し、事前に役割分担等を行い、日本同様に引率準備を行った。しかし、我々にもアニマターが2名付き、全ての管理を行うと言われた。こちらとしては、食事のこと、自由時間の際の管理等、気を遣う場面が多かったが、その際にも先生は一切気にし



ないでくれと言われた。ただ、こちらにも教育的意義、これだけはやらせてあげたいこと等を夜一緒にミーティングをし、共通理解を図り、コミュニケーションはしっかりとることができた。

フランスでは、責任の所在がはっきりしており、逆に私たち教員が指示をしてケガをした場合の保障などに、とても気を遣っていた。また、アニメーターには、公的な試験を通過したものしかないので、ある程度の管理・指導については問題ないが、日本側から見れば、若干高圧的・いい加減な部分も目立った。その隙間を埋める役割は私たち教員側が行った。

その地を知っているアニメーター・インストラクターが全ての安全を保障すること、前回報告書にもあったとおり、教師は教科指導のみのプロというはっきりとした役割分担は、ある意味いいシステムであると思うが、児童理解に長けた担任教諭が主に引率指導を行う日本の良さも、今回の3泊4日の引率で感じることも多かった。

②日本の良さ

2度目の下見時に、現地の子達が宿舎に泊まっていた。その際、部屋を見学させてもらったが、荷物は散乱、部屋から出た後、シーツを廊下への置き方はぐちゃぐちゃに置かれていた。そして、その後の部屋の中も整理整頓はなされていなかった。

日本ではこのような場面では、(使う前よりきれいにする)等の考え方で、整理整頓も体験学習の指導の一環として位置づけられている。部屋から出る、荷物を移動する等の指導は、基本アニメーターさんが行ったが、整理整頓については担任の方から指導を行った。現地アニメーターはそんな必要は無いと言ったが、シーツをたたむ、部屋を整理する等はしっかりと行う事ができた。

宿舎から出る際、掃除を担当している人、シーツを管理している人、副館長さんから、「オープンしてから10年間、子ども達がこのようにきれいに使用したことはなかった。とても素晴らしいことだ。」とお褒めの言葉を頂いた。

フランスは、世界的な歴史的遺産、美術工芸品が多く、世界一外国から観光客が来る国である。しかし、きれいな町並みの影には、多くの落書きやゴミのポイ捨て、電車内の汚さが近隣諸国と比べても一際目立つ。昨年度報告にも記したが、フランスは道徳教育というものが学校教育では皆無な部分が、このような形になって表れていると思うが、その一端がこのシーツや部屋の片付けにも表れていると感じた。



③施設の充実と宿泊的行事のあり方

今回の施設周辺では、ヨット・カヌー・オリエンテーリング・自転車・植物観察・ハイキング・歴史探索・美術館等、非常に充実していた。昨年度利用した施設(今年度は管理者の権利譲渡の為使用できず)、中学部が利用した施設、そして本校近隣にある体験学習受け入れ施設を見ても、どこも多岐にわたり体験・研修が十分にできる。日本では、その土地にあったメインな活動1~2種類・その他、という感じではあるが、体験的活動に十分に浸ることができるという点では、フランスの方が非常に優れている。また、日本で小6では、修学旅行で名勝地等を巡るが、こちらでは同じ場所に4年近く連続で通い、同じ体験を行い、深めるということを大切に、人間力を高めるということに重きをおいている、と聞いた。

話はそれるが、日本人の旅行者は観光地へ行っても、少し見学したらすぐに次の観光地へ移動する方が多い。しかし、フランス人のバカンスでは、同じ場所に1~2週間滞在し、その地でできる経験をどっぷりゆっくり行うことに重きを置いており、日本の旅行者を見て何を理解できるのか、とよく言っている。

宿泊的行事のあり方からも、各国のもつ文化、考え方が見えてくる感じがした。

以上、体験的宿泊的学習一つとっても、日仏間で多くの違いを感じた。そして、それらを注視すると、両国の国民性、考え方も裏から見えてきた。



《私が過ごした3年間：仕事編》

34歳で赴任し、まだ若手のつもりで赴任したが、実際に赴任すると同年代が多く、先輩に頼るという雰囲気ではなく、また人数も少ないので（日本の学校の約7割）、年次に関係なくみんなが即戦力として動かなくては行かなかった。

各年度で苦労したことは、以下の通りだ。

○1年目（小学部3年2組担任）

- ・各都道府県の授業や教育に対する考え方の違いに慣れること。
- ・いきなり運動会担当になる。6月の運動会当日に向け、着任後すぐに準備にとりかかる。
- ・子どもたちの家族との距離感の近さ。基本的に生活空間が同じであること。
- ・同様に、教員間家族との距離感の近さ。配偶者同士の仲も非常に重要であるということ。
- ・保護者の教育に対する意識の高さ。また、教員に対する本音の評価の共有度の高さ。
- ・大きな行事、小さな行事にかかわらず、データが全く残っていない中での仕事（基本引き継がないという伝統があった）。



○2年目（小学部5年1組担任：小学部主任）

- ・学年主任経験無く、小学部主任になる難しさ。年上や年次が上の先生に対する配慮。
- ・大きな行事、小さな行事にかかわらず、データを引き継ぐベース作り、意識作り。
- ・年次にかかわらず風通しを良くするために、毎日放課後ミーティングを設ける。
- ・運営委員会で、学校づくりの中心となって動いていく難しさ。
- ・新学習指導要領に向けての授業構成変更と、海外特有の問題（日本語に触れる機会）を解決するための折衷案作り。
- ・体験学習、社会見学の新規開拓。
- ・初の単一学級担任として、全てを受けもつ大変さ（自由さの方が大きかったが）。



○3年目（小学部6年1組担任：小学部主任）

- ・昨年度まで敷いていた5・4制（小6から中学部の教諭が教科担任制で教える）から、6・3制に変えた初年度の6年担任としての責任。
- ・東京を中心とした、有名私立校受験対策。
- ・自由に年度に関係なくざっくばらんに話し合える雰囲気作り。
- ・「全てを知っていなくては行けない」という3年目として小学部主任としての立場、次年度以降に確実に遺していく意識。
- ・中学部との連携強化。



以上、通常の30台半ばでは経験できない重要な役割や責任をもつての仕事は、当時は非常に大変であったが、今となっては全ての経験が糧になっている感はある。ただ、その際現地採用で20年近く日本人学校に勤務されている先生がおっしゃっていた言葉が印象的であった。

『もう何年も多くの先生を見ているけれど、北海道から来られる先生のレベルはみんな高い。だから自信をもって仕事してくださいね』

今年度派遣される先生方は、意識を高くもって、そして自信をもって赴任してください。

3 現地での暮らし

《食事》

他国に比べ、比較的日本人も多く、また中国・韓国人も多いため、日本人街・中華街がパリ市内にある。日本と比べると、日本食材店は約3倍、韓国食材店で約2倍、中華街で約1.2倍といった価格で、欲しい食材が手に入る。基本的には、お金を出せばどんなものでも手に入った。しかし、買出しにも時間がかかるので、月に1回米等を買出しに行き、あとは近所のスーパーで買ったものを調理した。最初は苦労したが、慣れれば全く問題はなく、昼は弁当だが妻が努力してくれたため、日本と同様に食べる事ができた。



ちなみに、パン・ワインの味は日本で味わう以上に美味しかった。

《生活：フランス人》

現地は、基本的に日曜日は交通機関（これもかなり減る）、観光地付近以外、スーパーから飲食店までほぼ休みになる。また、しばしばストも行われ、美術館から交通機関（通学バス会社含）、公的機関まで休みになることも多い。フランス人は、世界で一番有給休暇を消化（約38日）し、休みに対する意識が非常に高い。そのため、仕事に対する意識は上流階級は日本とほぼ変わらないが、一般人は基本的に日本より低い。

比較的親日的で、3年間生活をしている中で、差別を受けたと感じることは1度だけだった（中国人と間違われたらしいが）。フランス人は、『世界で最も日本文化に対しお金を使う国』である。象徴的な出来事として2つあげられる。1つは、年に1度、きたえーるの2倍ほどある会場で開催される、ジャパンエキスポの盛り上がりである。フランスで人気のアニメ・マンガのコーナーはもちろん、将棋・柔道・たこ焼き・ニコニコ動画等の日本文化コーナーまで、立錫の余地が無いくらい人が集まっていた。もう一つは、東日本大震災が起きた際の出来事である。私は、近所の方々にとっても心配された。また、モンチニー市でもすぐに募金の動きがあり、日本人学校にもフランス各地から折鶴や色紙等が送られてくるなど、とても心配している気持ちが伝わってきた。一見、プライドが高そうで、とっつきにくいイメージがあるフランス人ではあるが、心の底は非常に温かい人が多かった。



比較的近日的で、3年間生活をしている中で、差別を受けたと感じることは1度だけだった（中国人と間違われたらしいが）。フランス人は、『世界で最も日本文化に対しお金を使う国』である。象徴的な出来事として2つあげられる。1つは、年に1度、きたえーるの2倍ほどある会場で開催される、ジャパンエキスポの盛り上がりである。フランスで人気のアニメ・マンガのコーナーはもちろん、将棋・柔道・たこ焼き・ニコニコ動画等の日本文化コーナーまで、立錫の余地が無いくらい人が集まっていた。もう一つは、東日本大震災が起きた際の出来事である。私は、近所の方々にとっても心配された。また、モンチニー市でもすぐに募金の動きがあり、日本人学校にもフランス各地から折鶴や色紙等が送られてくるなど、とても心配している気持ちが伝わってきた。一見、プライドが高そうで、とっつきにくいイメージがあるフランス人ではあるが、心の底は非常に温かい人が多かった。

《生活：日本人》

現在、フランス国内に約3万人、パリ市（近郊含）に約2万人在住している。近年、フランス国内の失業率上昇と海外移民増加から、居住権を得ることが年々難しくなっており、またフランス国内の海外企業の法人税率を上げる政策施行や不況から企業の撤退が相次ぎ、その数は減少していると言われている。日本人の在住者は大きく2つに分けることができる。1つは企業等からの転勤者・家族、1つは国際結婚による在住である。

私たち派遣教員家族は、日本人学校に通う家庭と同じく約3年間の赴任なので、基本的に生活空間が同じになる。日本以上に児童・生徒の家庭と距離が近く、便利な面があるが、その辺が一番苦労した点でもある。ある教員の家族には、学校の先生の噂が耳に入ったり、逆に成績のことや学校内の裏事情等について聞き出そうとする家庭もあった。また、距離感の保ち方を誤り、家庭間の問題がこじれたことにより、仕事がしにくくなっていった教員家庭もあった。ある一定の距離を保ちつつ、上手にやっていく難しさを、特にどの配偶者も強く感じていたようだ。ちなみに、私の家庭は本校に関係の無い家庭や、国際結婚された家庭、現地人家庭、教員家庭を中心に仲良くさせていただき、大きなトラブルはなかった。赴任の3年間を、充実した生活にするために、結構大切なことであると思う。

《子育て・教育》

フランスは先進国の中で唯一、人口が増加している。それは、子育てについて非常に優しい国であることが大きい。基本的に、託児所から大学まで、基本は全てが無料。3人以上子どもがいれば、税金の大幅優遇や交通機関の半額等、様々な恩恵が受けられる。街の中でも、子どもの割合は日本以上に感じる。我が家の息子（3歳）は現地幼稚園に通ったが、基本的に徒歩10分以内に公的幼稚園があるようになっているので、非常に通いやすく、指導内容も日本以上に決め細やかな部分もあった。



現地小学校は、公立8割・私立2割といった感じである。担任の先生は、授業しか教えず、休み時間や給食時間は別の職員が対応する。また、パートの先生も多く、月・火と木・金・土で担任が変わるクラスも珍しくない（水・日は休み）。そのため、いわゆる（いじめ）の指導が徹底できずに、苦しんでいるこの割合は、日本以上であると思う。

《リフレッシュ》

異国での生活は、少なからずストレスがかかる。特に、子育て、病院や役所等、現地の慣習に習って生活を合わせなくてはいけない配偶者はストレスがかかる。家族サービスは、日本以上に大切である。幸いパリは、見所がたくさんあり、余裕がある際には観光できた。また、パリ日本人学校では、普段の土日は泊を伴う旅行は禁止されているが、夏休み・冬休み等には、年休を使っての旅行は認められている。多くの教員家庭は、そこで家族サービスを兼ねて車等で、近隣諸国に旅行に出かけていた。この辺は、ヨーロッパ派遣の良さである。

最後に

間違えなく、今回派遣教員を希望したことは、教員としても、私個人の人生にとってもプラスになったと言えます。日本で先生を続けていたら、決してすることのなかった苦勞や悩みもたくさんあったが、それら全てが自分を育ててくれたと思うし、いい経験になっていると言える。

これらの経験を、目の前の子どもたちに伝えていく使命が自分にあると思っている。その方法については、これからも学んでいきたいと思うし、この先も視野を広くもってほしいと思う。

最後まで目を通していただき、ありがとうございました。

以上、報告でした。